

1. 背景とねらい

りんごわい化栽培の普及に伴い、紫紋羽病の被害が生じてきたので 発生実態の調査や防除対策試験を行ってきた結果、早期発見法、発病推移、発生要因、発病樹に対する対策等の知見が得られてきた。個々の対策についてはさらに検討が必要であるが、紫紋羽病は総合的防除が必要であり、その対応の手順と防除対策の概要を指導上の参考に供する。

2. 技術の内容

- 1) 対応の手順 生育不良樹を認めたならば、図1に示す手順にしたがって対応する。
- 2) 早期発見法 秋期に台木の地際部を観察し、菌糸膜（フェルト状、淡桃色～赤紫色）の有無を観察する。またりんご休眠枝（長さ30～40cm）を春期に台木に接するように土中に挿入し、7～8月に抜き取って菌糸束の着生の有無を調べる方法で早期発見ができる。
- 3) 発生要因と対策 発病には図2に示すように多くの要因が関係する。圃場ごとに発生原因を明らかにし、それぞれの対策を講じる。
- 4) 発病樹の薬剤対応 発病樹の根幹部の腐敗防止と薬剤費 処理時間の効率的防除をねらい、台木部から半径50～60cmの範囲にダイセンステンレス1,000倍液、40ℓ/樹をかん注あるいは注入処理する（図3）。

3. 指導上の留意事項

- 1) 発生要因別の対策を実施するが、発病樹ばかりでなく、健全樹も含んだ園地全体の対策を行い、予防、蔓延防止を図る。
- 2) 薬剤のかん注処理 根を傷つけないように深さ20cmを目標に土を掘りおこし、かん注する。根が傷みやすいので、地際部が平坦で黒ぼく土壌のように掘りおこしやすい圃場が適し、4月前半までに処理する。
- 3) 注入処理 すべての圃場で適用できるが、台木部を盛土していたり、土壌が固かったり、地表面に根の分布が多い圃場ではこの処理が必須となる。根が傷みにくいので4～5月の間に処理できる。注入は注入器を用いて行い、30cmの深さ全体に行き渡るように注入箇所数を多くする。
- 4) かん注処理後の土を埋め戻す際や薬剤処理の範囲外のところは、堆きゅう肥や尿素を施用し、新根の発生を促す。

4. 当該事項にかかる試験課題名

りんごわい化栽培における紋羽病の総合防除法

5. 参考文献・資料

昭和59年度～平成元年度 環境部試験成績書 岩手県園芸試験場

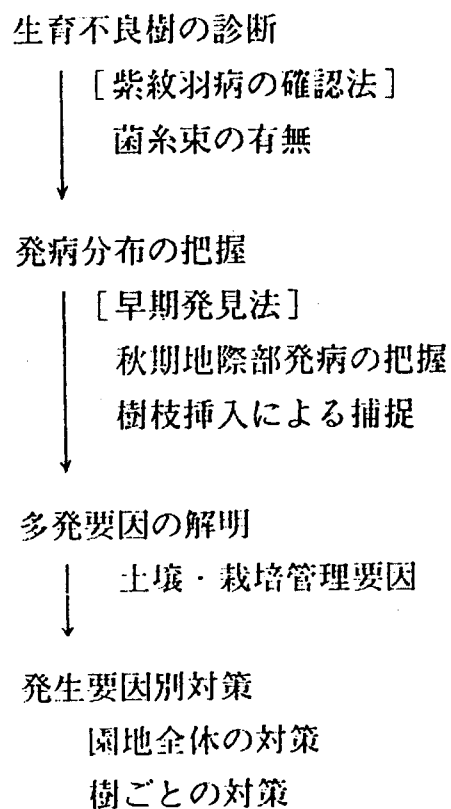


図1 紫紋羽病対応の手順

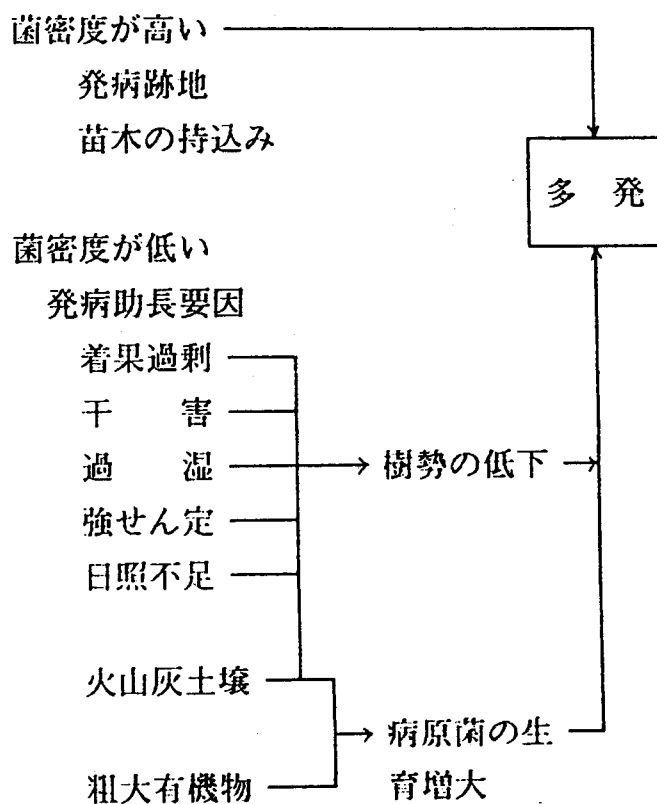


図2 紫紋羽病の発生要因

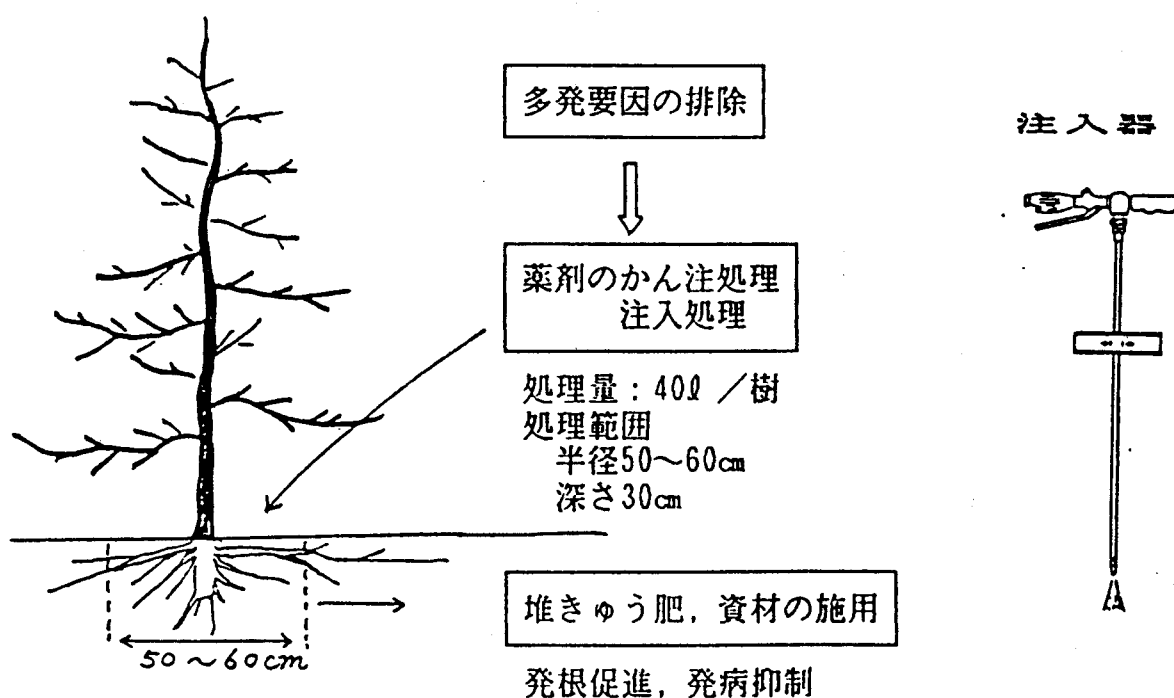


図3 かん注 注入処理の模式図